

早稲田大学 図書館紀要

第 71 号



図書館の貴重資料が教えてくれること (四)

図書館長 ローリーゲイ

貴族階級の女性、紫式部によって『源氏物語』が書かれてから千年以上の時間が流れた。その間、『源氏』は多くの読者に愛され、この作品に刺激を受け自ら作品を残した女性がたくさんいる。

平安時代末期、「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへと、心のうちに祈る」ばかりだった田舎暮らしの少女は、その読書体験を日記に記した(菅原孝標女『更級日記』)。鎌倉時代には、『無名草子』に『源氏物語』の登場人物について女性目線の論考が書き記される。『乳母のふみ』で、阿仏尼は宮仕えをしている娘に『源氏』を暗記するように助言する。中院雅忠女は「とはすがたり」で『源氏』若菜下巻の「女樂」が宮廷の遊びとして再現された場面を語る。『源氏物語』最後の巻「夢の浮橋」の続編の体で創作された「山路の露」は評判となり、慶安三年(一六五〇)に出版された「繪入源氏物語」に収録され、江戸中期に無名の読者が書き写したものも残っている(文庫三〇A五一、A五三)。

貞享四年(一六八七)に京都と江戸で同時に出版された『山路の露』(一〇二二・一九二)もある。こちらは、松永貞徳門人、妙仙尼の作と伝わる浮世草子である。ストーリーは越後の園鶴丸という少年が、離れ離れになった母を探す旅に出て、様々な出会いと別れを経験するもので、一見『源氏物語』と関係がない。が、「いづれの御ん時にか在けん」のフレーズや二十首もの和歌など、やはり『源氏』を意識して書かれている。貴族から庶民へ、さらに長い時をわたって受容されていく過程を示す貴重な資料である。

2024年3月